



## 説教要旨 「天罰という脅迫」

ルカによる福音書 17章 26～37節

イエス様は弟子たちに向けて、あなたがたは人の子の日を見ることが出来ないだろう（17:22）と言われました。「ノアの時代に起こったこと」。それは大洪水によって地上の人々を滅ぼされた出来事です。また、「ロトの時代に起こったこと」。それはソドムとゴモラの町の全住民を滅ぼされた出来事です。そうした滅びの出来事と同じ様なことが“人の子の日”いわゆる“終末”には起こると言うのです。しかしイエス様は、ノアの時代やロトの時代の滅びを引き合いに不安をあおって「自分を信じれば救われる」などと言っておられるのではありません。

「言うておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」（34-35 節）同じ所にいる二人の人、この二人には何の差もありません。しかし、一人は連れ去られ、一人は残される。神の選びとはそう言うものだということです。人間には神様の選考基準など量りようがない。じたばたしたところで意味がないのです。どうすれば救いに与えるのか、どうすれば滅びを逃れられるのか。などといったことに捕らわれるな。と言う力強いメッセージが聞こえてきます。

自分ではどうしようもないということ。そこに立って初めて私たちに出来ることがあるのです。自らの無力さに、価値の無さにうちひしがれ、自らの罪と向き合ったときに知らされる恵みがあるのです。無力で、価値無く、罪深い、見捨てられて当たり前わたしと、それでも神さまは共にいてくださる。わたしの無力さ、価値の無さ、罪深さをすべてご存じの上で、です。有力でなくとも良いのです。価値がある必要もないのです。どこまでも罪深いわたしを、それでも神様は見捨てることなく、それどころかそんなわたしのために、そのひとり子を十字架にかけられたのです。この計り知れない愛を示されながらも、神様を信頼しきれない。そんな私たちの弱さをもひっくるめて神さまは愛してくださっているのです。

（2020・3・1 説教者：稲垣真実）